

機関名	富士工業技術センター						
所在地	富士吉田市下吉田2095						
設置目的	産業の技術指導や研究開発を通じて、地域産業の発展に寄与する						
設置時期	昭和61年4月1日						
組織体制 (H19.4.1 組 織 体 現 在)							
	研究職	行政職(事務)	行政職(技術)	現業職	臨時職員	非常勤職員	計(人)
	14	3	0	0	0	6	23
主な所掌事務	①新製品の開発、新技術の研究開発に関すること						
	②指導業務に関すること						
	③依頼試験に関すること						
	④情報の収集・提供に関すること						
19年度の主な研究テーマ	研究概要	研究期間(年度)	19年度研究費支出額(千円)	研究成果			
タンソウ質繊維の高機能加工に関する研究	ウール・絹等のタンソウ質繊維をある種の金属溶液で処理し、金属繊維上に結合させることにより、この金属を有する抗菌性を付与する方法を検討する。本法は、タンソウ質繊維の染色性を伴うが、これが染料との共存によって色の深みを増すメカニズムとなれば、黒色系の織物においては数年の点みは有利なる可能性があるため、この効果についても検討する	19年度	417	タンソウ質繊維製品の高機能化を目的として、羊毛、絹等のタンソウ質繊維を低濃度の硝酸銀溶液で処理し、銀を繊維表面に付着させて繊維に抗菌性を付与する方法を検討した。その結果、繊維に付着した微量の銀重量に比例した抗菌別の銀付着量を評価したところ、タンソウ質繊維では羊毛が最も多く、次いで絹、大豆タンソウ質繊維の順に付着量が多かった。処理後の繊維は、ドライクリーニングにおける銀付着量の低下が見られず、効果の特続性が期待された			
貝灰による絹の精緻処理に関する研究	新規精緻法の開発を目的として、貝灰に注目した。貝灰は水と混合することにより強いアルカリ性を示し、近年でも藍染め等の際に利用されるが、そのアルカリ性を示す特徴を利用し、安価な精練剤として代用できることが期待される	19年度	127	新たな精練手法を開発することを目的として、貝灰の特徴を利用した新規精練手法に即して検討した。その結果、貝灰濃度を0.3g/Lにした場合、従来の1/5以下となった。一方、貝灰濃度を1g/L以上にする場合、精練が進むが、同時に糸の強度等が著しく低下する場合はなかった。また、精練後の染色性に関しては、COM測定より従来の同程度染色反応が行われていることが示された。さらに電子顕微鏡の観察により、貝灰濃度を2g/L以上にする糸の表面が大きく荒れていることが確認できた			

19年度の主な研究テーマ	研究概要	研究期間(年度)	19年度研究費支出額(千円)	研究成果
ネットワーク対応型デジタルジャカードの試作開発	市販PCにデジタルIOポートを組込み、開発ツールとしてVisualBasicを用いることによりヒューマンインターフェースに優れ、かつネットワーク機能を有し低価格で使いやすいくontrolローラを開発する	19年度	170	デジタルジャカード織機の専用コントローラの代替として使用できるように市販のPCを利用した制御装置の試作開発を目標に本研究を実施した。その結果、開発した試作機を用いて、既存の専用コントローラと同等の製織が行えることを確認した。また、LANを介してのリアルタイム制御の動作確認も行うことができた
高精細ジャカード織物製織技術の開発	「織物デザイン」の自社開発促進のための技術開発(H17-18)で開発した「画像の二値化処理」を応用したジャカード織物製織技術を、より高精度にし、また必要な画像処理工程を誰でも容易に行える専用ソフトを開発することで、本産地のジャカード製織技術の高度化と、地場企業への技術の浸透を図る	19年度	210	高精細の二値画像に変換し製織する手法を開発した。またその応用として、文様パターンと陰影を持った画像の2種の所を同時に生地上に表現する手法、色分解処理を行い連続した陰影と色調を継糸2丁で表現し白色印刷風のカラー画像を生地上に表現する手法を開発した
19年度に実施した研究テーマの総数	22件			
	数千円から数万円で購入できるUSBカメラ、フリーで手に入れることができる画像処理ライブラリを用い、製品の傷、汚れ等の不良の検出等が自動的に行えるようなソフトウェアを開発する	19年度	966	USBカメラとフリーの画像処理ライブラリを用い、安価な画像処理システムを構築することを目的とした。検査対象物をコンスタントとし、故障モードを「樹脂欠け」「端子異常」とした。また、背景はよく使われている緑色のベルコンベヤという条件のもと、画像処理に適したハードウェアを選定および照明設定を行った。さらに、オープンソース画像処理ライブラリである「OpenCV」を活用し、不良品検出ソフトウェアを開発した

機関名	水産技術センター	
所在地	甲斐市牛久497	
設置目的	水産に関する試験研究及び魚苗の生産供給等を行い、内水面漁業の振興を図る	
設置時期	昭和6年	
組織体制 (H19.4.1現在)	特別研究員(1人) 研究管理幹(2人) 所長 ———— 次長 ———— 本所 ———— 支所 ———— 水族館 ———— 研究員3 研究員7 研究員14 研究員2 その他4 その他7	
	研究職	行政職(事務)
	9	3
	1	4
	8	4
	29	
主な所掌事務	① 水産に関する試験研究及び調査 ② 水産技術の普及指導 ③ 魚苗の生産及び供給 ④ 富士湧水の里水族館の管理運営 ⑤	
19年度の主な研究テーマ	研究概要	研究期間(年度)
繁殖効率の向上	ヒナリオチ病・セウチ病・連鎖球菌症不活化多価ワクチンの実用化	16年度～
新養殖魚種開発研究	県内河川に生息する在来のマナブナを親魚として採卵し、稚魚を飼育して新魚種として普及させる	18年度～
資源管理技術の開発	溪流魚在来個体群の生息域を推定し、在来遺伝子資源の保全に配慮した増殖事業の実施の検討	8年度～
資源管理技術の開発	県内の透過型堰堤を調査し、魚道としての機能を調査	18年度～
漁業被害の軽減	繁殖期における擬卵置き換え・トラップによるカワウスの個体数が抑制された	10年度～
19年度に実施した研究テーマの総数	10件	

機関名	総合農業技術センター	
所在地	山梨県甲斐市下今井1100	
設置目的	野菜、花き、作物に関する試験研究及び技術普及並びに病害虫発生子察事業を行うことにより、県内農業の振興を図る	
設置時期	明治33年(1900年)	
組織体制 (H19.4.1現在)	総務課長1 その他3 企画研修部長1 企画調整科 研修指導科 環境部長1 作物栄養科 環境保全科 救育部長1 作物特作物科 野菜科 作物病害虫科 生物工學部長(兼) 応用開発科 資源開発科 農業技術普及部長1 野菜専門科 病害虫防除科 高冷地分場長(兼) 野菜作物科 花き振興部長(兼) 花き花木科 岳麓試験地 研究員1 ハッ岳試験地 研究員1 その他3	
	研究職	行政職(事務)
	27	4
	31	7
	25	2
	96	(1)
主な所掌事務	① 普通作物、野菜及び花き等に係る試験研究に関すること ② 農業に係る試験研究及び普及事業の総合企画に関すること ③ 農業経営改善及び環境保全に係る調査及び試験研究に関すること ④ 農業改良助長法の規定による高度な農業技術及び農業経営に関する普及指導及び情報提供に関すること ⑤ 病害虫の防除に関すること	



19年度の研究概要	研究期間(年度)	19年度研究費支出額(千円)	研究成果
モモ、スモモ、オウトウについて、消費者ニーズにあった大玉で食味のよい品種や管理作業の省力化できる品種を育成する	S63年度～	2,401	モモでは、食味検討会で評価の高かった3系統を一次選抜個体とした。スモモでは、食味良好な2個体を有望個体とした。オウトウでは131個体の果実調査を行った
(独)果樹研で育成された第8回普通モモ系統の本県での栽培適応性を検討する	S66年度～	248	採種会議において、果実品質が優れていた「筑波121号」が命名登録、鑑賞用を主目的として「筑波125号」が種苗登録のみの行うこととなった
環境に優しい病害虫防除技術の確立	14～21年度	2,093	ブドウでは、基雑草(H9)に対し農薬成分回数を約40%削減した減農薬防除体系の実用性について検討した。果下全般に晩腐病およびチャノキノイロアサミノウエによる被害が多い年であったが、試験圃場では実用的な防除効果が認められた。モモでは、生育期8成分回数(十AS認定農薬1剤)十コソフエーサーMM(検出モノ剤)で防除効果の実用性を検討した。問題となる病害虫の発生もなく、実用的な効果が得られた

19年度に実施した研究テーマの総数 191件

機関所在地	畜産試験場	中央市乙黒963-1				
設置目的	県内畜産農家の現場で活用できる高品質低コストな畜産物生産のための豚・鶏の試験研究及び改良増殖、並びに普及指導を行う					
設置時期	昭和11年3月山梨県立種畜場として設置、昭和37年9月畜産試験場と名称変更、昭和54年11月現在地移転					
組織体制(現在)	総務課 養豚科 研究員3、その他9 養鶏科 研究員1、その他6 畜産普及科 その他2					
研究職	行政職(事務)	行政職(技術)	現業職	臨時職員	非常勤職員	計(人)
6	1	3	3	13		26
① 養豚に関する試験研究 ② 豚の改良増殖 ③ 養鶏に関する試験研究 ④ 鶏の改良増殖 ⑤ 畜産農家への普及啓蒙指導						
19年度の研究テーマ	研究概要	研究期間(年度)	19年度研究費支出額(千円)	研究成果		
やまなしの新銘豚豚の開発	肉質や食味性で優れた系統豚を造成し、これを活用した新たな県産銘柄豚を開発する	16～23年度	19,657	第2世代で養育性や産肉性の優れた種豚を選抜し、第3世代豚を生産した。また、ふけ肉の原因となる不良遺伝子の保有状況調査を行い早期排除が可能であることを確認した		
やまなし新銘豚豚の作出	甲州地どりとブドウラウーの中間的な肉質を持つ特徴のある山梨独自の豚を開発する	19～21年度	230	レッドコーニッシュを父系として利用することで、増体量が確保できた		
夏季における採卵鶏の卵質低下防止技術	地球温暖化に対応して、採卵鶏の産卵を抑制する卵質の低下防止するための飼料組成について検討を行う	19～22年度	3,849	熱射病防止に効果のある重曹を添加しても食塩未添加飼料を用いた場合は卵質の低下が認められた		
ブドウ粕を利用した肉質改善技術	ブドウ粕を飼料に添加して肥育豚に給与することで、豚肉の抗酸化性を高め肉質及び保存性を改善し、地域性の高い豚肉生産技術を確立する	18～20年度	3,425	肥育後期の飼料にブドウ粕乾燥粉末を5%代替給与することで豚肉中のビタミンE濃度が増加し冷蔵庫内での保存性が改善された		
免疫賦活化物質等を利用した高品質ブドウラウーの生産技術	抗菌剤を利用しないブドウラウー生産を実現するために、免疫賦活化物質を利用した育成技術を開発する	17～20年度	1,121	液体メチオニンの利用により抗菌剤を利用しない飼料の利用が可能となった		
19年度に実施した研究テーマの総数		131件				